

Title	グループ意思決定プロセスにおけるコミュニケーションメカニズム
Sub Title	
Author	北村則龍(Kitamura, Noritatsu) 高木晴夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1992
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1992年度経営学 第915号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001992-0915">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001992-0915</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 北村 則龍

主査 高木 晴夫

副査 柳原 一夫

森川 英正

所属 高木 晴夫 研究室

## グループ意思決定プロセスにおけるコミュニケーションメカニズム

企業にとって、協働作業（組織活動）をする以上、会議というコミュニケーションの場は必要不可欠である。しかし、企業は必ずしも満足のいく成果を生み出す会議をしているとはいえない。著者は、こうした会議の重要性と現実の問題点を認識した上で会議におけるコミュニケーションのメカニズムを解明することに価値があると考えた。

本研究の目的は、コンセンサスを得るための意思決定を目的とした会議におけるコミュニケーションの構造と行動パターンの解明にある。本研究は、システムズアプローチによって問題解決を図っている臨床分野としての家族療法の基礎理論を背景としている。即ち、ベイトソンの循環的認識論及び、論理階型理論のコンテキストとコンテンツをツールとして分析を行なった。構造の分析では、遷移現象と特異現象（話題が移り変わる現象と変わらない現象）、遷移要素と特異要素（遷移現象や特異現象を引き起こす原因）、コンテキストとコンテンツの階層構造、コミュニケーションの制御を調べた。次にこうした構造的理解をした上で、規則性をもって再三繰り返される行動パターンに関する定性的比較分析と定量的比較分析を行なった。

本研究では、実験的会議を観察対象として、コンセンサスを得るための意思決定を目的とした会議におけるコミュニケーションの構造と行動パターンを明らかにし、その問題点を描きだした。